

2 . 流域の自然状況

2-1 地 形

流域の周辺は、東は北海道の脊梁をなす日高山脈の 2,000m 級の山が連なり、北や西は 1,000m 級の山で連なった分水嶺を持っている。流域の形状は、ほぼ北東にのび、流域平均巾は約 13km と比較的細長い形状である。

流域の形成は、上流部の日高山脈は中世代末から新世代にかけての日高造山運動の時代に既成され、山腹斜面は急峻な満壮年期的な地形をしており、河川勾配も 1/100 程度を示す。また、中流部は、おおよそ標高 100 ~ 400m の範囲にあり、山腹斜面は一般的にやや緩傾斜を示すようになるとともに、河岸段丘の発達が顕著な晩壮年期的地形を示し、河川勾配も 1/125 ~ 1/200 程度で日高町、平取町振内および貫気別などの主要集落がみられるようになる。下流部は、標高 100m 以下となり、山腹斜面はさらに緩斜面を示すとともに、河岸段丘もさらに広く発達し、海岸段丘もみられるようになり、平取本町から下流部には沖積平地の発達もみられるような晩壮年期 ~ 老年期的地形を示し、河川勾配も 1/500 ~ 1/800 程度となる。

2-2 地 質

流域の地質は、古生層の 1 部を除き主に白亜紀層と新第三紀層より成り立つ各種の層群と貫入岩で形成されている。貫入岩帯は主稜部に発達し、火成岩類では斑禰岩、カンラン岩、変成岩では結晶変岩・変麻岩が多い。

層群では水系の東側より、黒色粘板岩・細砂岩のなかに硅質岩・輝緑凝灰岩を介在又は互層する日高累層群、砂岩・泥岩を主とする富良野層群、輝緑凝灰岩を主に硅質岩・粘板岩等を含む空知層群（この層群には蛇紋岩が振内北部から左岸にかけて分布する）などが南北に帯状に連なり、そしてその両側には滝の上層・川端層から成る新第三紀層が連なっている。

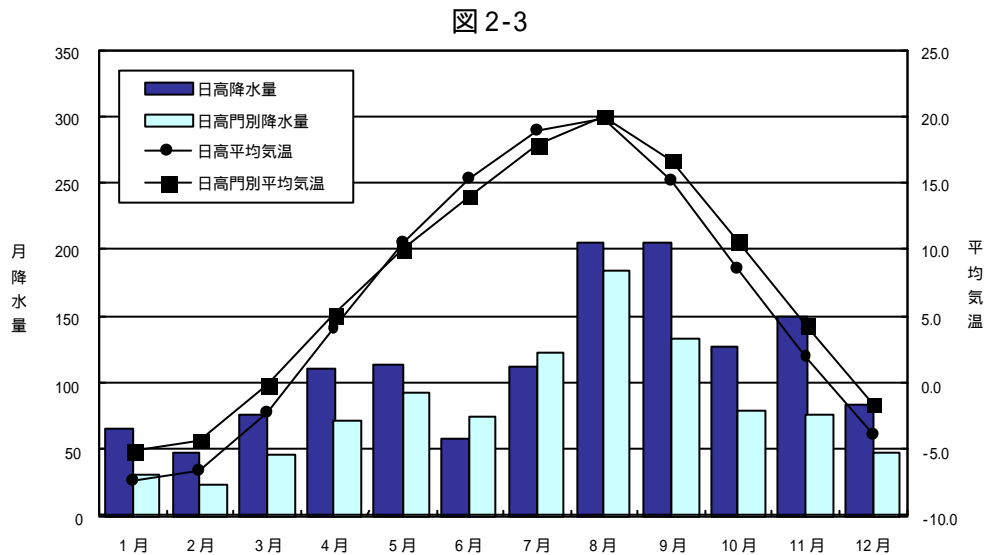
地表は一般に砂礫を混入した砂壤土・植壤土でおおわれているが、川に面する急斜地では基岩の露出している箇所が多い。下流部においては、土砂の堆積等で土壌も厚いが、表層には樽前火山灰が 5 ~ 20 cm 程度堆積している。

2-3 気 象

沙流川流域は、太平洋側西部気候区（表日本型）に属し、太平洋岸から内陸へ約 80km の南北方向にやや細長い形状の地域である。

海岸部（門別町）の夏は、沿岸を何かする親潮の影響で、あまり昇温せず海霧を伴う冷涼な日が続く。また冬は、シベリア大陸からの影響が弱いため、積雪量の少ない比較的穏やかな気候となり晴天の日が多い。

年平均気温は日高門別で 7.3 であるが内陸にはいるにしたがい標高が高くなるため低下し、日高では 6.2 である。年平均降水量は、日高門別で 975 mm、日高 1,353 mm である。日高は内陸的で 8 月の最高月平均気温は 22.7 、1 月の最低月平均気温は -9.5 と寒暖の差が大きく降雨も台風や低気圧の影響を受け、8、9 月には 200 mm/月を越える。日高門別では、海岸性で気温差も少なく冬期の積雪も少ない。8 月の最高月平均気温は 22.9 、1 月の最低月平均気温は -5.2 である。降雨は 7～9 月が 120～190 mm/月と多いが、これ以外の月は 100 mm/月以下である。



出典：北海道の気象 統計期間 1987年～1996年

表 2-1

	日 高		門 別	
	平均気温 ()	年降水量 (mm)	平均気温 ()	年降水量 (mm)
1987	5.6	1,283	6.6	900
1988	5.6	1,029	6.6	763
1989	6.9	1,512	7.8	940
1990	7.4	1,538	8.5	1,082
1991	6.6	1,184	7.6	769
1992	5.9	1,728	7.0	1,223
1993	5.7	1,181	7.0	1,050
1994	6.5	1,218	7.8	878
1995	6.2	1,518	7.5	1,187
1996	5.3	1,342	6.7	956
平均	6.2	1,353	7.3	975

出典：北海道の気象 統計期間 1987年～1996年